



繪入

山柝古史

^ 13
3297
4



へ13
3297
4

山柙大夫榮枯物語卷之四

江東 梅暮里 谷我補編

大正十年八月廿九日
本大學出版部

第十三

安壽姫死と變りて神窟小投と

愛の心は應丹後國由良の藩ぬ千軒長者と笑はし山柙大夫といふ者
あり由良の庄橋立の庄成合の庄の二庄と領し奴婢数多召はくし飽きて
富れといふも足事と云ふに淫人をも天の恵もあやといふ家富學あへ
けふ先主山柙大夫死す後ハ毒搦立お入夫して名跡を相續はしれ今乃
山柙大夫是なり死すての各番無道なる者おもひふりしお搦立が邪見
放逸自然と推しつる露むかりも情かほしれを驚か或人勾引賣んとて
身者おれハ男女と分て僅の價なりて購取弱きもの別人おめつり利
と合買り健かぬの留金奮と奴婢と諸ともに負載荷物牧の勉とて分り

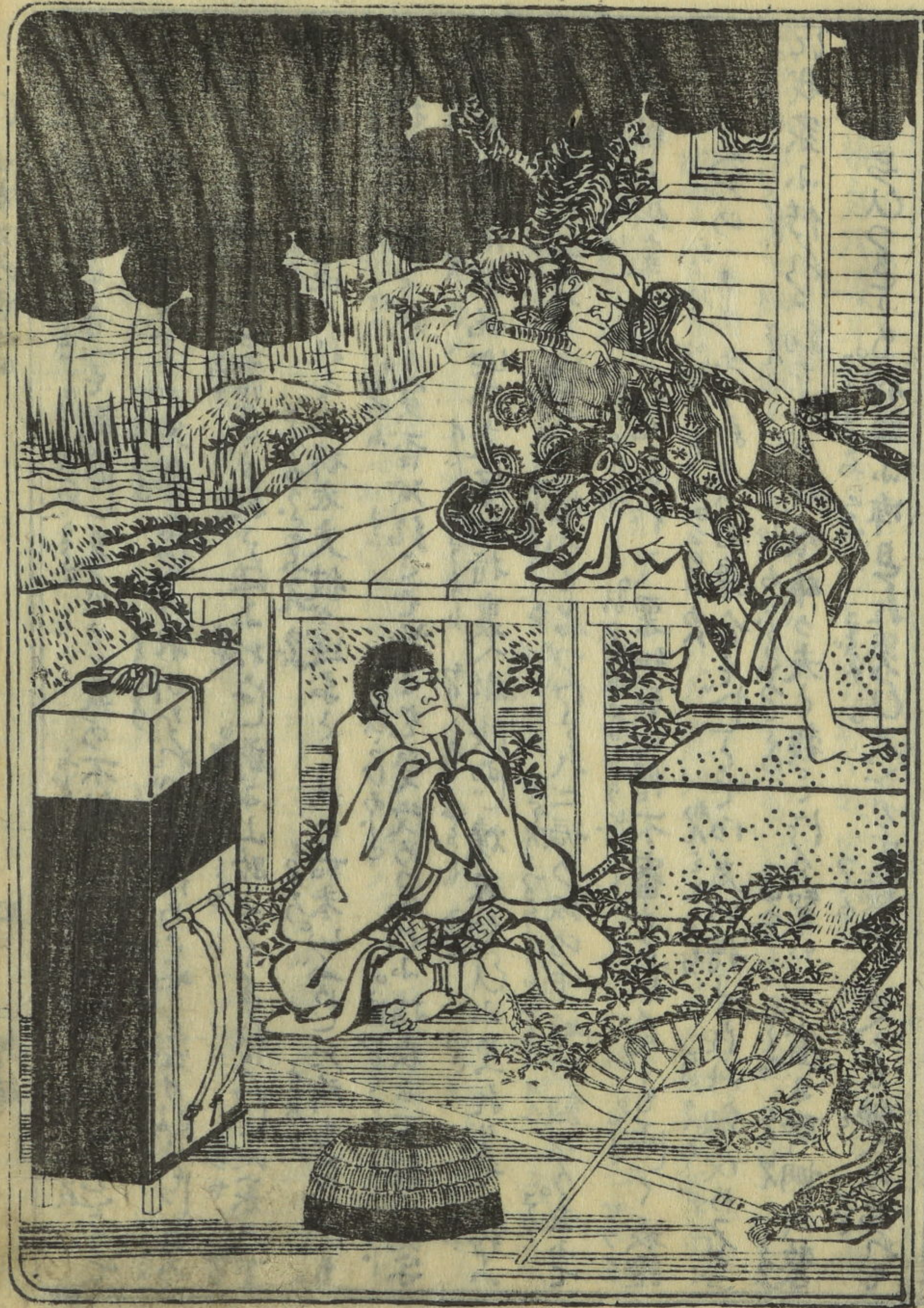
山柙大夫卷之四

我は伊せざるの災あり。項日當國竹野辺の郡牛莊の神地身もはしり故也や。
 年々神殿鳴動して神箭多く乱飛。家棟棟もまると流の女にて穢も
 供ごれるのみ。奈神の古例となと。いふ所の宿世の定め也。當主山井太夫此
 家へ連まり。娘雄お其も。し有れば深く歎き妻捨立もいふなれ。こ流
 や。笑の中の劍もせめて雄といふ。此節の凶事に神母らら歎き俱あひ
 け。似合志こ人の見女とりて贖ひうべ。災害権もねる。づれの吉也より。は
 小子と思ふ。闇ももく。み黄金と惜まると出て購ひ求りんとて四方へ人々
 走らせ捜しとくも。似氣もなれ見女のと多く空しく暮行われ。其日
 月の間近と歎き悲こ。折男門へ音耗。お者ありける。奴僕告る。れど。
 いふれ。奴を同あひ。に我も回國の修行者なり。此家の男女を購はる由
 と父。遠路もまじとせめて二八むかり。れ秀色の見女と誘ひまじりなりと云

入且。われは太夫夫婦待り。りけ。れ所なれ。疾此方へ。候と。して。笑はる。旅宿
 次第。對面。及。入。由の指揮。なれ。し。ひ。と。奴僕。は。ぬ。に。告。り。系。故。及。の中。より
 件の娘と取出し。手を携へ。坐にけ。の。夫婦。と。下。目。入。く。驚。と。果。して。頭。へ。最
 々たる。緑。髪。面。と。紅。粧。とりて。た。と。け。れ。も。娟。した。れ。容。貌。あ。て。娘。雄。も。お。こ
 劣。ら。ぬ。容。儀。な。れ。の。こ。れ。め。て。ハ。神。慮。も。宥。む。と。よ。流。と。び。り。れ。の。當。家。の
 愛。女。の。災。ひ。も。一。日。二。日。に。縮。まり。ま。れ。心。せ。う。お。ふ。養。目。宜。見。女。と。信。ひ。ま。す
 且。此。の。才。こそ。我。為。め。再。生。の。恩。人。なり。と。厚。く。食。意。せ。ば。旅。僧。の。仕。海。たり
 と。お。お。ほ。び。且。此。家。の。娘。容。顏。美。麗。なる。に。こ。流。も。う。と。れ。今。一。計。施。は。む。や。と
 ち。い。が。ま。づ。て。お。入。し。黄金。の。か。と。より。時。明。く。ん。と。少。し。誇。り。て。い。れ。と。これ。な。れ
 信。夫。眉。目。よ。れ。の。こ。お。お。ふ。母。母。は。う。れ。に。流。は。う。り。も。母。の。意。気。肯。て。又。年。才。一
 若。く。み。流。く。依。て。母。才。の。艱。苦。と。え。れ。お。忍。び。ど。これ。を。救。り。ん。と。て。その。身。一。個。也

悲^{しみ}と抱^{かか}と^も身^みを^も黄金^{こがね}を^も賣^うんと^も母^{はは}を^も希^{ねが}ふ^れ見^み女^{むすめ}と^も感激^{おんげき}は^も價^{あき}の^も貴^き賤^{せん}を^も
論^{ろん}せ^もと^も踏^ふ費^{づかい}を^も貯^{たくわ}へ^も持^も一^{いつ}黄金^{こがね}百^{ひゃく}兩^{りょう}を^もて^も購^{かひ}取^とり^もひ^もす^もり^もね^も愛^{あい}を^も肯^{かたが}ひ^もす^もひ^もる^もは^も
分^{ぶん}占^{せん}し^もす^もべ^もし^も太^{たい}夫^{ふう}夫^{ふう}婦^{ふう}の^もあ^もご^もみ^も笑^{わら}ひ^も我^{われ}愛^{あい}女^{むすめ}必^{かならず}死^しむ^も追^おれ^もの^もと^も別^{べつ}く^もの^も娘^{むすめ}を^も以^もて^も
償^{つぐな}う^もと^もす^もれ^もふ^も黄金^{こがね}の^も費^{つひ}を^もい^もと^もり^もん^もや^も連^{つら}侍^{しやく}婢^びを^も佐^さ語^ご黄金^{こがね}百^{ひゃく}兩^{りょう}を^もと^もり^もよ^もせ^も旅^{りょ}
傍^{そば}ふ^もと^もへ^もい^もと^も安^{やす}堵^どは^も見^み女^{むすめ}を^も渡^{わた}さ^もれ^もへ^もと^もい^もけ^もと^もば^もを^も慚^{あは}愧^か世^よを^も定^{さだ}めて^もと^も
慚^{あは}の^も心^{こころ}僧^{そう}も^もあ^もれ^もは^もじ^もれ^も行^い状^{じやう}胡^こ倣^{ぼう}者^{しや}と^もい^もひ^も玉^{たま}り^もん^もが^も人^{ひと}を^も勾^{かぎ}引^ひ世^よを^も渡^{わた}る^もと^も
か^かり^りの^も者^{もの}も^もあ^もら^もば^も説^{せつ}明^{めい}と^も思^し慮^{りよ}な^もれ^もふ^も似^にれ^もど^も慙^{あは}徳^{とく}な^もれ^も人^{ひと}も^も
の^のい^い今^{いま}の^の身^みの^の法^{はふ}と^も善^{ぜん}ふ^もを^も慚^{あは}と^も我^{われ}素^そ性^{じやう}と^も詳^{しょう}か^もい^もん^もあ^もら^も近^{ちか}江^えの^の國^{くに}を^も故^こある^も
卿^{きやう}士^しの^の一^{いつ}子^こな^もり^も先^{まづ}の^の比^ひ盜^{たう}賊^{さく}の^の為^{ため}に^も圖^とら^もど^も父^{ちち}を^も討^うと^も家^か賊^{さく}悉^{しつ}く^も奪^うつ^もれ^も
其^{その}場^ばも^も在^あり^も合^あは^もと^もて^も父^{ちち}を^もさ^さし^もと^もけ^もと^もわ^われ^もり^も歎^{なげ}と^も目^め指^さへ^もと^もも^も知^しと^もれ^もと^も死^し
ゆ^ゆ代^{だい}と^も罪^{つみ}と^も贖^{あが}り^もんと^も白^{しろ}双^{じゆう}小^{せう}面^{めん}に^もら^もう^もせ^もぐ^もい^もや^もと^もよ^も大^{だい}死^しな^もと^もも^も芝^{しば}泉^{せん}の

父^{ちち}へ^も辞^{こと}も^もま^もは^もじ^もと^も心^{こころ}と^も乞^こと^もえ^も僧^{そう}と^も身^みを^も中^{ちゆう}に^も諸^{しよ}國^{こく}を^も廻^{まわ}り^も又^{また}ハ^も刀^{たう}頭^{とう}の中^{ちゆう}へ^も交^かう^も
か^かん^ん父^{ちち}の^の怨^{おん}敵^{てき}を^もも^も尋^{たづ}ね^ねれ^も踏^ふみ^もか^かと^も身^みを^も捨^すて^もと^もを^も浮^うせ^も瀨^せも^もあ^あれ^もと^も夫^{それ}より^も親^{おや}
や^や角^{かく}を^もつ^もれ^もら^もら^も當^{たう}國^{こく}の^の長^{ちやう}者^{しや}の^の許^{もと}を^も乞^こひ^もめ^もり^もて^も眉^{まゆ}目^めよ^もら^も見^み女^{むすめ}を^も尋^{たづ}ね^ね求^{もと}め^も
る^もを^も父^{ちち}丹^{たん}後^ごと^もめ^もれ^もば^も吾^{われ}父^{ちち}に^も因^より^も結^{むす}び^もお^おけ^もふ^も人^{ひと}の^のと^もま^まじ^もり^もも^もあ^あれ^もを^も最^{さい}
ゆ^ゆじ^じく^くお^おり^もあ^あら^らば^もけ^もら^もい^もも^もこれ^{これ}を^も孝^{かう}女^{によ}も^もめ^もり^も合^あは^もと^もい^もね^ね決^{けつ}と^もい^もく^もつ^もれ^もふ^も
頼^{たの}め^めれ^もと^も素^そより^も泪^{なみだ}の^のり^もを^も性^{じやう}質^{しつ}な^もれ^もば^もと^も中^{ちゆう}に^も肯^{かたが}ひ^も孝^{かう}道^{だう}と^もま^まじ^もり^もと^もば^もじ^もと^も
踏^ふの^の費^{つひ}を^もい^もと^もの^のご^ごニ^にッ^つも^もと^も此^{この}家^かの^の福^{ふく}を^も救^{すく}ひ^もか^かば^も一^{いつ}方^{はう}お^おけ^もね^ね善^{ぜん}根^{こん}の^の天^{てん}我^{われ}
我^{われ}惡^{あく}し^もと^もも^もお^おほ^ほと^もま^まじ^もこれ^{これ}を^も敵^{てき}の^の廻^{まわ}り^もと^もり^もや^やめ^めえ^えと^も誘^いひ^もめ^めり^も見^みめ^め
を^を信^{しん}じ^じら^られ^もば^も太^{たい}夫^{ふう}夫^{ふう}眉^{まゆ}を^も皺^{しわ}め^めぬ^も身^みを^も近^{ちか}江^えへ^も何^{なに}か^かの^の者^{もの}な^もれ^もと^も同^{どう}く^くれ^もば^も我^{われ}ハ^も近^{ちか}江^え
の^の國^{くに}滋^し賀^か郡^{ぐん}苗^{めう}鹿^{らく}村^{むら}の^の御^ご士^し純^{じゆん}馬^ば膳^{ぜん}輔^ほが^が一^{いつ}子^こ親^{おや}吾^{われ}と^もい^もつ^も者^{もの}なり^{なり}親^{おや}く^くれ^も言^い約^{やく}
定^{さだ}な^なせ^せば^も見^み女^{むすめ}當^{たう}國^{こく}の^のめ^めり^もと^も父^{ちち}幼^{せう}少^{せう}の^の初^{はつ}め^めて^も只^{ただ}其^{その}家^かと^との^のと^と父^{ちち}お^おほ^ほえ^え家^か名^な



住居の地とて一帯と斯帯し、あれとて風の不動の梵字を彫り、此劍をとりて
 互の表證となすべしと父常子より社折られ、尋求むやとたりし、此の
 克処かを悔くらら無道とされ、はふおはし、前山山踏むるにけし、此家乃下
 部の吐く傳母迷うれを、山井太夫彼が述ふとて、海の始末いじり、此所もあれども
 子持所の劍を試み、実否か、此とやとて受改められ、小指表も不動の梵字
 次彫、矜羯羅制叱迦の文字、次指裏へ彫、汝は焼又匂ひ小至れ、さて之を
 するも、されに銘せられども、雌雄丸と名づけられ、二振の劍の中、雌の劍なり、去りて
 も、膽輔も似氣も、これ宿癖、所作、栗毬頭の僧不審く、おり人も、正しく表證
 となく、その一、あの上へ名乗合、とて、此の持たれ、此劍改め、
 に、我家小傳、劍なり、我娘雄が夫と頼む、ける、聳なり、直子、聯姻を、整
 へ、くも、おひつ、とも、我娘小傳、とれ、笑ひ、人、とりて、贖ふ、と、くも、神への、おれ、

あれ、心、権、為、次、慎、ま、せ、れ、な、り、ま、づ、く、公、が、が、我、家、の、産、業、と、て、さ、る、ひ、人、の、骨
 次、珍、母、は、し、身、と、細、母、做、さ、は、ど、け、し、し、些、は、う、も、ゆ、れ、せ、な、く、怠、ら、ま、じ、れ、こ、と
 お、れ、と、細、母、に、教、え、ら、れ、ば、と、や、聳、母、な、り、な、れ、意、地、を、大、小、喜、び、雄、を、て、色、の、り
 氣、が、お、眼、小、情、を、通、せ、ん、と、す、れ、も、雄、を、父、の、い、し、る、又、云、名、付、の、觀、吾、と、か、ら、の、取
 ち、う、に、腹、も、ゆ、く、お、ば、う、り、お、れ、と、父、の、お、ひ、こ、て、な、せ、し、來、も、お、れ、に、連、た、が、な、し、
 お、ひ、お、れ、根、え、と、先、の、年、吉、野、の、國、花、見、が、せ、し、と、れ、何、所、の、人、も、知、ら、ば、れ、れ、も、
 花、も、羞、ら、れ、絶、世、の、美、男、子、お、り、ひ、護、ま、は、戀、の、公、静、さ、る、小、床、を、同、う、做、も、嫁、の
 端、あ、ら、ぬ、と、心、小、盟、ひ、ま、し、て、徒、母、過、行、空、の、限、り、な、れ、日、次、數、へ、ま、し、し、人、の、お、
 ぐ、お、お、も、と、め、と、父、の、約、定、が、せ、れ、毒、が、夫、と、か、る、人、の、身、じ、え、ん、終、い
 と、聯、姻、も、整、ふ、母、至、れ、ば、し、と、れ、を、肯、ん、ら、ば、必、を、父、の、怒、り、受、不、孝、の、罪、次
 作、お、べ、れ、ど、の、色、佛、の、男、子、の、お、り、ひ、浮、岩、お、人、小、易、ん、と、の、歎、け、し、た、

索性祭神の例もはつり齋宮とちふば神慮もかゝるひ人の子も苦めと
 ころ後小悲まゝ父母の前と退き我小房へ信夫を伴ひ竊みしをいひ
 薄命ありて此家へまじり母の為とせうは最まると孝公のおことと
 ふ久手放しわれこの邪見さしとせしれものよと齋中を控ちりけれ信夫の泪
 形が更小邪見われ母人なるに妾達だれれその厚く朝も夕もの管も
 公づひの薄うは勿辨なくし侍も妾心ひりり母人の目と忍び此國
 へまけれも跡もくつむむ尋ひまらんとおひは流るる後もけし難面も
 優さみも先づ泪と薄命のなぐひ痛く泣けぬれば借こそ母の斗ひも
 の真孝とや其とんかろり母が牙と天よりなせれ禍ひを黄金の威光とり
 人の愛女に譲れるの道なくはさし罪咎と悔那を根とも甲斐
 なく互ひ母三世をおひ廻しいと託き打散たりれ処へ竹野の神主祭神の儀

式次修され沐浴身と清め白布に身次纏ひ今宵妾の刺おを穢とゆわれ
 とや身代として信夫を荒氣引くとは信夫と驚れとや待くよ志生と斯
 とはうひみ人ぞや母の為に身代賣さし今更惜しむわら経ども黄金お
 身代贖へも死母かんとははらげり情味さかへ官仕し追く母人も呼
 迎んと給せしゆ母の歎きも少くそと餘所おえしけり小穢おかざるば
 川の村より起り達て流るるびみおたえるべやある情なの宮人といへるも
 安忍む引まれば袖も雄を纏いて中よま女お代り宮衛し備り人として
 せける小穢おゆんといふ状妾か命の惜しむも人の親の子代もあつひお
 ニつもなれぞしある情なの父上や無慚なれ母上やもつを使人あて
 泣叫び信夫とお隔けれをかくて果しと尸祝られを制とといへも更母肯
 ぐざれば所為なくけ方お昏れを橋まき此度状をせ走りりて婢女お

山崎太夫巻之四

五 増補

指揮して雄を深房に押やり信夫と責てつるハ僅の價をりて四方の人を抱へ
 下日山へ登り焚木を折せ其人の強弱より。或も十把二十把束薄きは
 四十把五十把も折せり。又も野へ放ちやりてハ五百束千束の萱刈せ
 濱へ行ちりてハ五十荷六十荷の塩を汲せたり。常とは余多の黄金を
 出し汝を買とり。煙のごとく消失せしむ。汝妻とて願好むせぬ所なれども
 祭神の古例とあれが塗方も形。數多の黄金を費せたり。汝と汝妻と
 才以贖ひ死せれと必ひらる。汝れを妻が方ちるうに増えし。此期其いごと
 愚痴を練出しし。あも肯いじ。いごとよく死。就よと荒しく罵りなれ。ハ
 情なき。汝の者どもに。い。程い。あも塗な。う。れ。さ。去。あ。く。も。い。ま。一。と。ら。び。母。人。を。ま
 ぶ。れ。る。の。名。残。惜。さ。と。雨。く。と。悔。ひ。教。え。法。華。經。一。部。携。へ。称。宜。尸。現。母。誘
 つれ竹野の神窟へ至りぬ。信夫とかりひ明らぬ。御徑續誦ふ一公を凝しらる。

偶と岩窟の中をさし覗と見えぬ。一丈むかりの棚をか。四方に幣帛をま
 かり。八尺の俎のう。み。壹尺八寸の庵丁。内著ととも。に飾りあり。されど
 ぬる怖じ。い。う。が。れ。憂。目。み。の。り。ん。ぞ。と。胸。打。駭。と。け。と。も。心。を。ひ。れ。ぞ。一。さ。く。も
 か。ま。つ。ね。も。の。な。れ。ふ。斯。ふ。未。練。の。と。れ。と。持。む。母。の。御。恩。以。無。か。な。と。さ。は。し。一。つ。め。を
 親へ孝行の為ニ。つ。め。は。才。を。代。り。せ。し。黄金の恩徳なれ。今更驚く。そ。れ。ふ
 め。い。は。い。此。上。を。母。人。の。為。妻。が。る。現。世。後。世。も。な。ぞ。う。れ。べ。し。經。文。も。一。切
 有。為。法。如。夢。幻。泡。影。と。説。多。ふ。實。お。愛。幻。の。此。才。な。れ。ば。五。袴。を。借。宅。の。才。と。く
 流。れ。を。り。て。去。る。と。快。し。何。者。う。此。神。窟。に。在。とも。怖。し。か。じ。只。一。時。は。命。を。断
 後。の。世。を。助。け。多。と。公。法。華。經。念。誦。あ。く。な。れ。ふ。宮。人。系。り。種。ぐ。の。装。束。は。
 白。幣。以。振。神。樂。を。奏。ぶ。り。れ。と。や。四。更。の。比。お。及。び。し。う。神。人。古。例。の。ご。と。く。俎。の。上
 小。信。夫。を。の。せ。内。著。以。禱。り。の。方。へ。押。あ。て。庵。丁。と。り。と。頃。の。上。より。足。の。先。も。と。と。度



かぐおらしし二刀切とれ式次第し信夫と床よりおろし窟の肩を押開たれを血鮮と
猛風の吹出せられも思はざ窟の中へ押入り荒氣に戸を建衾宜神主も引退く
哀し信夫とちりく聲とわげ法華経讀誦といはなき哀とつるもあつらあり。

第十四

睡月の方孝小因一度甦

叔睡月の方と安壽姫の跡を慕ひ吟呻ひ歩行ゆれども何方と宛所なく古の
面影の眼も留れざれば朝もあるやと憑かりひける今日も空しく暮る日と悲
濡る袂のほろに乾んとせられ同もねく眸子曇り眼内爛と了母盲となり
く尚海岩慕ふのこ流流く安壽忠や姫な月じやと呼叫ひても見ろ
都志王丸も妙の行傍のまればるに安と心もわんば其上母の痛く歎とあふ
酌と足もすはぶられ母の杖と持そく其身の食れ乏きを汲もいとる母
へさしむれ一椀の飯とに人の情もよれを家群の富れ國とと捨る情もあつら

りもやゆらめとふおろしひまほしすしりしむせき丹後の地へ入ぬれ聖の童子
のとり巻くやよ眇者日の恩と受れとも日の状を知りぬれやと罵りぬ
ども回答もせられ傍も銅盤持し童子これを探りてく知ればははははは
銅盤取らて日のかざら斯の如しといて嘯と笑ひけしは睡月の方都志王
丸小歯を切らりおろしされも富れ國うればこそ鄙小めれへて品ものわ
ざるを存し目と侮り嘲哂なるともたはうりけ来糸へられへやま女が
日の状得がくた小喻ふも道の入がくたハ日よりも甚く薄命の者たして
侮り嘲哂なると道小むる日の状を妾小教へうりて露がうりも道小入は
とつらんかも若親くが笑をば露の命をばまぐつ障ふりやとくくしたる
おろし廻らせと神を濺り佛を恨と玄蕃要道を悪しと思ひぬれ日とてもや
とやくこが去去と行人とせが花子よ替者よといて哄と笑ひく

傍小より磔と打て逃走れを杖にて拂ひ都志王と母を覆ひ隠るる面白く
 おりひくや杖も拂ふとも詮なかるべし長者の許へゆきて粟のやまは鳥を
 追ふこそはしなから免とさへに悪はし打磔の石を雨よりも繁くかてい
 いふ成へると都志王と母を以てり。脊中て防は衝くその場は逃のひねとや
 夕梵も近まれへ何所の軒下佇まぶ一夜の情を乞ひ受人も益の飯と食
 せど空腹をらむごめりもね。母と子の為不悲をみかじ。子ハ親のよめ
 泪が押へしあは公の里の童子輩。打磔をりて母人と若くは腹をらや
 どやと怪我じ志多しやと回へも只頭と振るのみ。歩行のよめも常
 かりり苦し氣にえへるれへ母人あはば悪くともさへんといふに
 ちや面の色も損じ腫と地も倒れ息もあへん氣もえへちれへ都志王丸ハ
 大に驚死右方左方おまよりの母上よくと聲が限りにはひ叫ぶも今ハ

答の更状へ入極。息吹かんとさへもええさうけれこの何とせん貯りし
 薬ににりの頂よりう盡果灸焼ん母も艾もな。何一うも任せね
 かさして途方と失ひ待たば富の國と中かへは少しく行む人のゆる地
 至らん。さうり母人獨跡へ残し置まふはなから里の童子の頑要を故人
 もてかるとぞ。大や鳥も心なうづれば傍を離れがじとやんども薬と灸
 などもつとむる息吹返さるゆめははしと行るの戻り度りて行おひ凌して
 行るに富の村落のこえけは怒の中にか得る豪家の妹小女とこへ
 こそ不幸に艾を賣店あり是とそ天の賜と。おひひはさても代るに錢もあ
 折るに頼んとて慇懃に沽賈人母子が突りて我母は辛苦せ故や
 病ふとも形眼々み途の街中と喘息と臥息はね灸など焼なば息吹かき便
 もめんと公せけとも貯。艾もはささともなへんたつく歎にこみこの店も

とうぐさど活買たりんれこそ嫉しくおひはれ見もさく價となきて品入つれ
 りれば眼前の具丹空しくなるとの悲しにみられなれ艾を少し惠こむられし
 と低頭平身ふくもされれも主人を利のそに走り情心露こかりもぬく
 罵りしれを。やよ人の活買押を食らんとていつくの偽々吐き出さばと
 かりのゆに惑めへさや憎と阿古の光棍疾ゆうざれ中と杖又振上撃と
 かりがらなどて母の病と假初もも恨りはしていつるぞ忌はれゆりのはひ
 用もべたりのももねと艾押より得るれ逆何せん疑いと暗し此下はぐこの
 情をと頻ふをかりあらも公せつれ母の身の中とまつ居つと海更
 に安らふに主をわごと笑ひやされ美少年女の似氣もなれ口賢ことと
 果して賊の小裁形もあ後の懲あめの為うてよ叩けと取すに身動もこを
 ざりけは爰に頃日此國の長者のりとに居るれ託馬觀吾といつる傍始也

終りとくよりえて居るが何ぞひつれ母やこれを制して艾の價と出買え
 都志王丸母よへやなむよ楊見ももせあ母の病を愈さんとも用ふ艾と
 艾を價せしといふも千金も易がた一品なれ汝恩次郎り孝とぞや
 母へよし後うへんそ我親の家れ奴とおりて恩を報ひよ又兼引とば
 母の一命も救ふるゆかろあはじと餌を出しと責けとばかお必死よ耐ら
 れを悲しみを中肯ひ艾得るれ公と和氏が壁よりも尊びこつ後も空み
 ま戻り臥るれ母を抱き起せし母夏状もいふかろてえへまれば胸當ひ
 ほれとも一灸さえて母人よ二灸すえて母上より後をはけてあつとしと
 鳴る声も泪も隔まざれと孝子の公通とや息吹返りひのい高都志王
 声くに母人よ心はじしう娘やる氣ははしう母持まへ爰と丹後の街ぞや
 こゝものるがあれらるば我方を何となるべとと泣口説ひひる睦月の



方を浮世の風も吹戻す。都志王が身を振りかへり、の息も絶えず、世よ
 浮沈の舟の中に、くぐり、連ねと薄命の者、れあるぞ、夫も別き悲し、れ
 も、兩位の子、めて、また、世に、が、娘と、孝い、行方、あれ、ぞ、これ、故、母と、此、日、盲
 汝、ふい、と、瘠、り、と、も、姫、の、と、と、か、と、恨、む、は、じ、發、明、と、り、器、量、ま、て、磐、木、の
 世、継、と、生、ま、れ、果、報、と、正、しく、持、つ、た、身、も、か、れ、微、運、也、辛、苦、お、ひ、先、長
 ね、身、の、は、開、く、運、も、の、を、た、そ、足、す、て、の、行、り、し、艾、め、て、灸、も、た、ん、ぞ、
 す、え、れ、が、た、と、く、く、が、死、う、れ、と、も、定、期、と、あ、ら、う、を、さ、く、心、い、く、歎、く、は、じ、
 情、ぬ、り、た、人、も、あ、ら、う、灸、も、ま、く、貫、か、へ、く、煩、ね、こ、そ、孝、行、ぞ、都、志、王、丸、の
 父、悲、し、は、も、く、娘、か、と、母、の、り、言、我、と、も、何、だ、公、不、苦、あ、れ、と、も、俱、な、け、ら、
 尚、更、母、の、身、の、ら、い、お、め、と、ら、ん、と、怨、と、い、と、あり、け、れ、と、公、認、く、て、な、ら、ん、と
 此、若、し、み、ハ、昔、語、福、い、付、ま、ら、し、陸、月、の、方、の、改、振、と、そ、れ、ハ、汝、が、必、不、育、く、

妾、を、今、も、と、か、れ、れ、ぞ、と、懷、中、の、金、佛、の、地、藏、さ、り、出、し、都、志、王、丸、お、涙、一、妻、が
 信、心、の、尊、像、な、れ、ば、と、や、汝、は、護、ら、ん、と、亡、跡、を、違、と、大、事、に、肌、身、お、添、み、し、
 と、い、う、速、く、入、後、入、を、あ、り、次第、お、息、も、川、汐、の、都、志、王、丸、再、び、周、章、呼、べ、と
 叫、べ、と、回、答、つ、つ、と、は、実、諦、所、く、を、残、り、く、焼、し、も、更、お、志、し、お、く、咽、く、と
 去、く、骨、氷、の、と、く、骨、節、と、と、く、強、直、臭、氣、と、や、鼻、止、り、り、僅、ふ、一、朝、の
 露、の、消、る、間、お、む、と、く、都、志、王、と、母、の、上、へ、覆、い、か、さ、り、と、や、母、上、よ、い、と、一、度
 そ、の、を、り、て、お、り、れ、や、常、に、可、愛、と、宣、ふ、の、空、ふ、り、お、て、は、し、ら、ん、や、姉、お、人、あ、ら、な、し、
 母、上、お、死、つ、れ、捨、れ、れ、我、ひ、と、り、此、未、い、ま、り、ん、ぞ、と、去、り、て、母、上、の、別、と
 あり、い、盡、す、れ、も、形、を、種、く、此、辛、苦、一、日、安、と、心、も、お、ろ、く、あ、ら、に、吟、呻、彼、所、お、れ、
 馴、も、は、あ、ら、な、ら、ん、と、子、ゆ、い、お、更、よ、い、と、ひ、ま、り、と、妙、上、の、の、の、り、勞、は、く、成
 め、い、賤、か、ら、ぬ、身、を、お、て、め、と、さ、り、路、の、巷、お、死、い、ら、ん、と、武、運、を、め、と、

世の薄命なれと云れり。其の隙に母の亡骸入り地の精舎の隅にも葬り
 取臥泣てり。あはしありて母の真母の亡骸入り地の精舎の隅にも葬り
 公をかりれ佛事なるとはく。國分寺へ願ひはし。亡骸を埋めたる正に陸奥
 三郡の主とされの室家騒動より。國民一日安んじ。海も形。陋巷も困死せ
 る。いふは前生の悪報也やありけん。世はほりて。逆賊貪死詐暴論
 の七函のふびや。

第十五

小櫻觀吾、夾約を責れ

とて託馬觀吾と。大和の國吉野へ花見せし時。小櫻とて。これ妓とて。互に
 裏なれ公より。苦界もあづじ。縁由も具申かたり。本家あてあり。其のたぬ
 とせば。父へも明し。身贖えと約定はし。権のころ。これをほし。家おぼり。其の父の
 何者の為。あ討。且財寶も棄れ。藏り。れ。戸も明ひ。つ。び。と。あり。け。是。は。半。と。

奴隷の業も。あり。け。ん。と。頼。と。好。と。次。恨。と。て。も。甲。斐。な。く。人。お。面。と。合
 と。れ。も。漸。と。直。地。母。古。御。女。去。り。て。出。ゆ。く。日。も。小。櫻。の。夾。約。を。恨。ま。人。の。便。り
 なら。を。お。り。し。れ。の。こ。只。南。れ。父。の。敵。の。ま。が。ら。て。求。め。ん。り。小。他。事。な。く。神。へ
 祈。り。仏。へ。誓。言。ひ。繁。花。の。地。を。捜。さん。と。撰。津。の。國。有。馬。と。四。季。の。温。泉。も。名。高
 けれ。人。集。れ。所。と。や。敵。を。求。む。便。ふ。り。や。と。神。崎。の。日。と。て。公。遇。さ。る。小。有。馬
 道。接。州。路。と。左。右。お。か。し。何。と。公。小。濱。の。り。且。公。尼。が。崎。と。心。惑。ひ。眇。味。ゆ。ふ。碧。窓
 烟。蘿。ま。と。ひ。落。日。紅。葉。の。場。せ。景色。誰。住。ふ。別。業。や。と。床。く。え。ま。や。と。公
 あり。幸。ひ。路。同。の。と。と。戸。外。お。か。と。お。く。と。又。小。橋。を。觀。吾。が。情。深。と。こ。心。意。も
 乱。と。日。く。使。り。音。信。を。待。く。恨。と。夢。幻。の。姿。お。足。ゆ。れ。の。こ。空。しく。月。日。が
 送。と。も。一。と。せ。忍。べ。二。と。せ。待。も。更。不。甲。斐。な。し。身。を。人。お。贖。ひ。し。れ。ば。仮。の。住
 居。も。定。め。が。く。其。上。約。せ。吉。野。も。老。女。の。邪。見。不。足。も。さ。ら。め。ば。れ。む。と。あ。づ。保

達んもほり断なんの。愚痴をいして待と恨とと燃一はの積つて終ぬ
 病の床小嬰。今を捨津の國神壽の極下れ許丹引龜。医療をほく
 せも験なく。臥され枕。響く聲も緑一の深と端あり。彼方との声お
 観吾と入は入く差視の痛く病臥る女こそ人まがへくもわね小橋を
 と路。あつたも忘れ小橋。めてとつらされ中。推うらえ中りけ。小はくも
 けは。ぐへも。ぬく。悉人の声色。緑一れ。尺。をほび重と枕。放。つれを。
 後。久。其。人。舌。強。胸。静。好。行。方。の。冷。薬。お。は。あ。は。悲。人。あ。て。や。
 あり。なる。し。と。心。の内。お。あ。の。と。泪。小。押。隔。逢。る。幸。あ。は。積。眼。と。先。と。
 ぞ。れ。る。の。も。打。解。く。し。お。い。情。深。と。極。下。の。と。外。お。答。ひ。と。その。も。ぬ。く。不。審
 お。り。の。と。ほ。し。先。と。招。け。れ。ば。観。吾。小。ご。ら。が。傍。お。居。り。病。れ。を。る。に。内。脱
 疲。瘦。動。氣。衣。次。扇。と。呼。吸。揃。り。と。上。昇。の。氣。満。面。お。わ。り。れ。桃。李。の。ご。と。く。

助うれを。復状も。又へ。れ。が。両眼。お。泪。と。浮。め。と。ぞ。な。恨。と。ほ。く。ん。が。あ。は。し。り。
 是。し。より。古。御。へ。ぬ。り。父。の。横。死。の。訣。より。と。ぞ。の。薄。命。が。れ。一。部。始。終。世。し。
 説。話。外。お。れ。人。も。ぬ。く。と。あ。の。傍。お。あり。て。看。病。を。な。ん。も。も。れ。と。人。お。
 任。せ。と。安。倍。の。つ。れ。を。と。強。と。と。い。て。宿。志。を。遂。な。ば。音。耗。か。は。は。
 食。之。と。れ。と。丹。も。と。と。め。浅。と。と。と。と。の。持。ち。う。め。て。本。腹。か。と。と。な。
 と。何。事。も。心。を。凝。と。と。氣。と。段。く。と。持。直。と。と。と。の。れ。を。熱。く。ら。え。と。愚
 痴。を。い。て。又。し。も。妾。が。心。死。勞。し。ま。あ。や。斯。病。の。床。よ。り。て。も。珠。と。情。あ。り
 と。極。下。の。医。療。も。と。と。い。く。も。原。来。君。が。慕。ひ。ま。か。す。れ。よ。り。登。且。つ。る。病
 神。仏。の。加。護。又。と。い。う。か。れ。靈。丹。も。治。と。と。れ。も。ぬ。く。と。う。れ。後。も。病。ひ。重。り。死
 す。べ。た。ぬ。か。れ。ば。君。が。穢。れ。へ。と。お。の。り。と。肌。お。添。守。取。出。し。父。あ。る。者。の。賜
 じ。此。袋。の。中。に。と。父。の。本。名。妾。が。生。じ。年。月。日。を。記。あ。れ。ば。亡。跡。と。ま。は。し。

紀念とは一編の回向をこそ願ひたりとて
 惜み引留られ行がどく思ひくれば此と心改め
 今月の色惜みおぼれ歎
 小廻り逢んともせびして足をさぐりなば
 父尊皇の怒あらんかへて薄情と
 責ばして又逢ふ誠を待ばして細やうに
 心を原より伶俐めてよく物と弁へ
 めれど今別と又逢へとぞなかりば
 心を悔え遠えぬ昔の安かんと恨
 法外阿といて倒れ觀吾も大に慌と
 呼かすも回答も形く良茶と
 念入
 小も口や歯を咬む膝の上へ抱のげ
 水を食んととれども呼吸の通ひ
 一滴も通りと詮ども形く熟小
 橋が顔をほりり視る此体も
 良茶も
 神佛の利益めらば愈々ふもあ
 らんと堅小目も涙を泪溜りゆ
 なくもも向の水となれり小橋も
 公足えぬ疾とほふ完かくと何
 物
 いたげぬえゆれども無常れと
 思ひとサして清濁の別と
 至るぬ觀吾も



山崎大夫巻第四

十五

ほもなれぬ中におぼけあり愁傷もすゞ道我一個傍りありて死
 難とされ薄命の如れ如何なる災難も遇へも回られどと安ふは
 ち小主紙門の中より泣くなら出泪ながるるか入く元実のらん
 もされりなれど所詮治と病ありてもかかるとるを定めし
 死を待とて今も存命けおのりゆる徒の縁も満かると珠
 を忘りもなぐ憂難難を露はるもいとつれ我へも實儀を以て仕
 さればせめて傍りありて向の水もす借を報へむやとおひはれ
 こそ彼が年月暮ふ男子と悟り待馬の際なご公ふひ積るる中
 せと斯く身らひけるのりぬ幽栖人きく今宵夜ととも我とおほ
 回向は正念往生をせしむる此人もかた善根なりと最切なり
 らるを安じとすれまに佛事公堂と翌日にかれはらぬ足とぞめ

かたを述く厚く謝し生別と池田伊丹のほとり廻り小濱より山越
 有馬へ至り。權時この所お遍留に捜求りんとせれども固より敵の回
 名もまれがれを徒ふ月日ぬさぬりつめて足を止むれども手
 何国へも行むやと有馬へ出ら諸寺諸山に詣て父の敵を殺す
 合せりしと宿願は名所舊跡お目もさめぬ接麻名跡より丹後の
 へ至りわれふ神社佛閣多くせしお増れ絶景あり殊小園富ん
 此所不足なれり事な計らふとせしとせし旅亭を求めんとすれ
 のこまなく人苗づた業の宿もえぬとせしとせし此豪家の許
 苗系宿なれ物おは此家より宿を乞ふとせしとせし物乞とい
 茶あるのりして奥の方より二八廿二過されとおひと見
 出奴婢ナうと農事又山川へ出たり用事ありは妾小とせし
 けかほ

山本大蔵巻三十四

十六

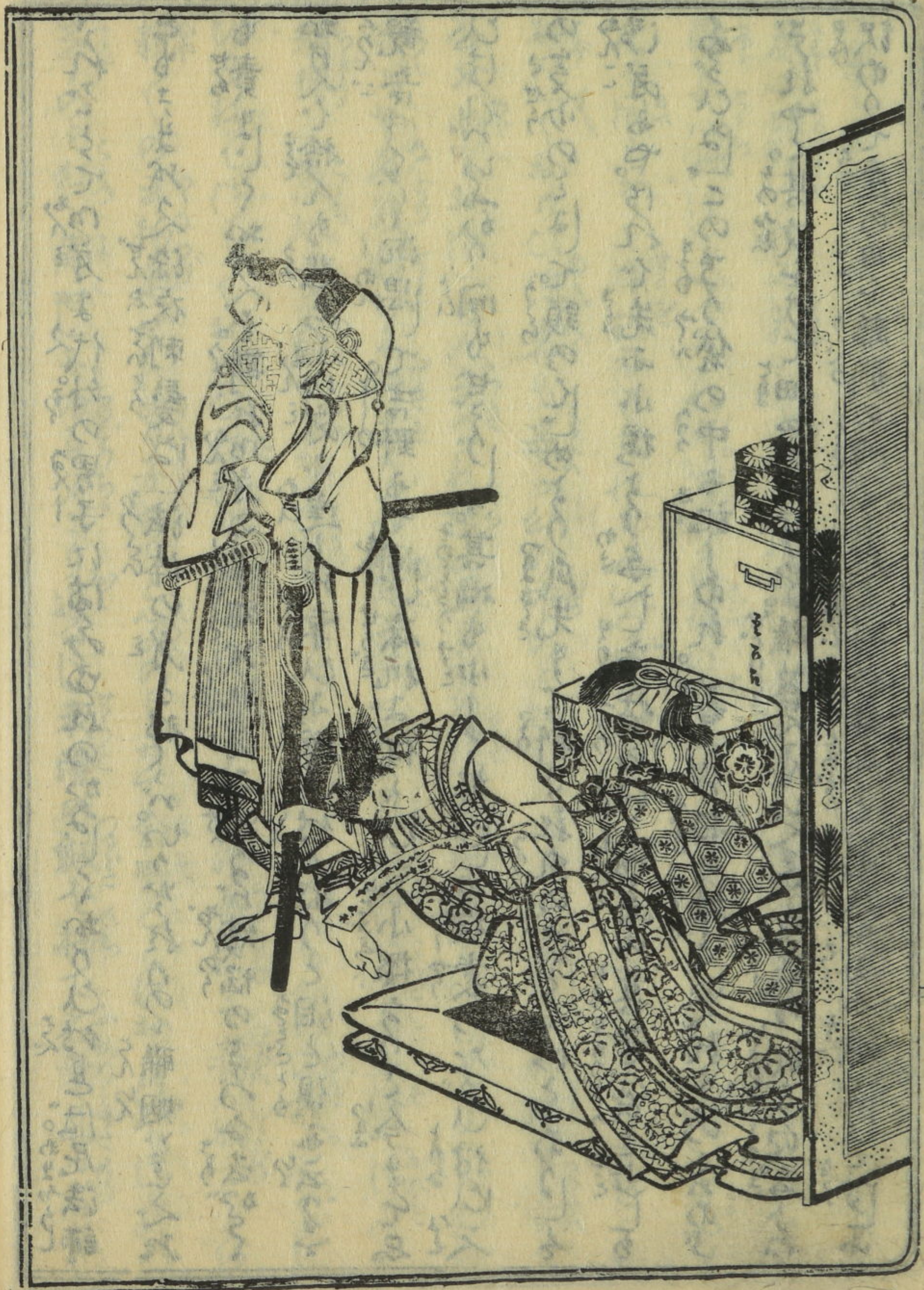
増補

見れ小鄙めげげに美麗の女形りと側らうて互母驚さるる観音
 おりれへんまがふもあな小様なりと公坐母なりけを押しめ
 小櫻と神壽母と病死す我まといと歎きし此所は又のれを
 わるは是空虛のころ流母付入り狐狸の訛りそののなめり我ま
 小ばらう中有小はより成佛なるとや阿弥陀仏くと唱へ合掌はし
 出んとなきも待つてよと袂ふすがり此方の方と見覚もはし
 理なれどもえまがふもあな此方のつるまよりらほしと
 の姿目ふ放しに尺時も忘れ秘をわりのひおとせたる人おく暮し
 せ死さべと禍の身小陣に道をさび人小讓了餘所おえはし
 今一とび達をれ幸もあらんくと待詫しありのて今達といふ
 の嬉しはふ女の羞をれをもかく云わらふとよくも満溢とを

憐み旅店へ足を止めみひりたうらなりとも毒が家お逼留はしむれ
 けしとおけけふりもれ観音も今へ狐狸妖怪もあなげれ悟
 我吉野めてりかきせし小櫻とられ女先の頃おまかりしと
 されおの容兒小櫻お露むかりも違ふもあなゆゑと感ひゆる
 とらをめてる流をびりれと妻お似とれ別人と細繆あふと
 ばれよふおおれ嬉しくけり妻と流の深く流りなげれを
 端近なうかてんせり人肌お母添をれ守袋の中より一枚の短冊を
 観音手は取めり
 春霞を引山の櫻とさるれもあな君もあな
 と吟とを我先の年吉野もくもく徳め櫻の枝へけし短冊なり
 いじて心身のあ入るそとらわりの同む待む十年とも永くおめひ

つとどてや明は三年の前春の弥生の初め吉野の國の春盛り。そのも
 藤は照添れ小糸も羨べと絶世の美男子と思想の公は満れむた
 酔れ心地とありやれふ。いふおる縁の端や床は同ふされの懺と誓
 えり間もかく床枕をとせられふ。いづ地の心方と同一まらせんもささぐ
 恥しくありひ浮岩も妻が公の中のとほへて出さぬと吉野の神も妻が
 公は恤とおぼしるん先るは様のおりよれ枝は短冊をけけり。いづが公の
 欲や名残惜け舟行きの跡めてせめて此短冊は肌身も添へけり
 網琴一意地と朝さかふ樂しみけり。今日も公の不義といへりし
 いふ様むはけり。ありひけれは具小説話もいふは憂涙と妻が初と
 親くの云約定せられ男子のりと夢のともて余所ごとにおりひてはさ乃
 幸のともと寄せし。頃日父より送るし表燈の劔を持て名乗る者あり。

いれごとては代外の男子にはみゆれのかさし。ありひけれは尼法師
 ともよまぬ之深衣刺髪は法体の身とけり。いふはありの聯姻とて
 も責はしくありへ。斯れは身の手跡は肌身も添る。煩惱のさるまは
 おり心捨人も悲とあり。小達は幸ひも返りけり。いと涙と俱云る
 観吾はく。沉思して吉野も同じ床枕は体は。いづ小櫻あり。今も思
 ひけれは。いふかり同もせり。其初も少く疑ひ。衣裳のたははは
 のま少のとはて。頭のじめより瓜先けて割られ。仇のささく。似ありしを
 洗ふや。はれを先も小提より。守袋の切と。其守袋と。少し
 めは。いづ。このちり袋の中。記し。あれ。若くは。子の雄と。し。れ。その
 ざれや。其政をりて。細やうに。守。雄。答。え。り。あ。ま。ま。妻。が。初。の。考。え。
 沢のりて。産の母を。離別の。時。と。つ。と。子。の。妹。雌。と。し。れ。を。母。小。添。り。と。は。い。



扱^{あつか}す^{おん}の^のが^のひ^ひま^まの^の妹^いも^もて^てあ^あり^りけ^ける^るよ^よ。こ^この^のあ^あら^らの^の慕^もの^の君^{きみ}と^との^のみ^みお^おり^りひ
 暮^くし^しゆ^ゆれ^れふ^ふ珍^{めづ}多^たく^くも^もひ^ひは^はれ^れば^ばづ^づら^らの^の行^ゆ衛^ゑの^のな^なま^まに^に。今^{いま}は^はな^なが^がれ
 浮^うぶ^ぶなり^り。名^な所^{ところ}も^も洋^{やう}の^のあ^あり^りは^はせ^せ多^たく^くし^しこ^この^の観^{くわん}吾^ご今^{いま}の^の包^かひ^ひこ^こら^らも
 那^な。我^{われ}を^を近^{ちか}江^えの^の國^{くに}苗^な鹿^か郡^{ぐん}託^{たく}馬^ま膳^{ぜん}輔^{すけ}の^の一^{いつ}子^こ。託^{たく}馬^ま觀^{くわん}吾^ごと^とい^いは^はれ^れ者^{もの}なり^りと^とて
 小^こ房^{ぼう}と^と達^{たつ}初^{はつ}の^のよ^よと^と死^し別^{べつ}也^{なり}。未^{いま}だ^だ残^{のこ}り^りの^の泣^なき^きを^をあ^あて^て説^{せつ}結^{けつ}し^しけれ^れば^ば雄^{ゆう}を
 託^{たく}馬^ま觀^{くわん}吾^ごと^とい^いは^はれ^れて^て喜^{よろこ}び^びの^のあ^あり^りか^から^らに^に去^さり^りて^て先^まに^に託^{たく}馬^ま觀^{くわん}吾^ごと^とい^いは^はれ^れて^て名^な告^つ入^いり^りし
 其^{その}心^{こころ}或^{ある}は^は色^{いろ}弗^ふの^の觀^{くわん}吾^ごと^とい^いは^はれ^れる^るか^から^らに^に祈^{いの}願^{ねが}は^はし^しぬ^ぬ觀^{くわん}吾^ご心^{こころ}と^とい^いは^はれ^れる
 と^と我^{われ}を^を名^な告^つ入^いり^りて^て往^い來^{らい}の^の事^{こと}を^を得^える^る。あ^あの^の心^{こころ}を^を尋^{たず}ね^ねる^るか^から^らに^にあ^あも^も成^なる^る
 中^{なか}と^とい^いは^はれ^れる^るに^に高^{たか}織^{おり}那^なと^とい^いは^はれ^れる^るに^に雄^{ゆう}不^ふ誘^より^りし^し雄^{ゆう}が^が小^こ房^{ぼう}へ^へ忍^{しの}び^び行^いく^くぬ
 却^{かえ}り^りて^て抱^{かか}り^りて^て先^まに^に入^いり^りし^し託^{たく}馬^ま觀^{くわん}吾^ごと^とい^いは^はれ^れる^る僧^{そう}常^{じょう}非^ひ我^{われ}の^の行^いひ^ひに^に

第十六

摺立禎子の悪僧と達

山本大夫巻之四 十一

做さの一田田量ありけふのものと未頼母あかりひるれ母や為る皆う後不
 叶ひけしな。りつこお、惠を深くとり扱ひ一日人氣なれ折をん合せ観吾と寝
 房へ招れりつれ、汝馬騰輔が一子記吾と名を此家へまじし。美月よれ
 娘雄を娶んと。二ツの賤室の多きをいん込偽りれ名をいし。そのおめり也。
 腹中が裂く。ん。れが如くいけ。は權回答して赤面はしける。了得不
 大膽不敵ののなれ。言と巧申してし。れを斯る豪家の件へ零落する
 形勢めて訪ひし。故は猜疑をうけれ。ののあり。表澄とな。一品我詳らな
 げれる。汝の達の目利で劔をりて因なれる。をを。れ。の。あ。ふ。を。を。
 兒女が賣へ。め。に。あり。あれ。此家の世継ふ。な。は。お。も。悔。ま。と。と。冷。く
 速。く。れ。橋。立。の。天。女。合。み。され。今。一。條。同。色。し。汝。切。と。初。な。れ。と。公。小。弁。い。れ。る。お
 や。汝。を。原。近。江。の。比。叡。山。の。麓。に。捕。へ。太。兵。六。が。家。み。出。せ。は。し。名。と。と。郎。と。云。て

六女のとれ父太兵六ふら。折檻せられ。逃入とて。荷鎌父ふ。う。ら。は。け。恥。を
 松ひ切死。か。及。び。ぬ。子。ご。汝。も。父。を。殺。害。は。し。つ。れ。を。怖。慄。し。母。や。直。不。亡。命。
 ま。し。ぬ。汝。が。母。を。え。め。り。や。と。的。當。の。一。句。や。め。り。得。む。逃。出。さ。せ。く。ん。入。れ
 を。こ。や。責。め。あ。ま。の。ら。び。か。入。て。勞。を。れ。奉。な。う。れ。切。と。耐。ふ。め。久。も。初。頼
 の。失。され。なり。殊。は。遅。く。尤。の。時。子。二。あり。妾。が。腹。が。若。し。肉。牙。と。か
 一。子。二。郎。お。と。と。ま。ひ。も。斯。る。豪。家。に。実。母。あり。け。れ。を。不。審。お。り。ひ。縁。由
 を。臭。に。や。め。ん。が。夢。の。公。地。て。敢。と。喜。ぶ。と。橋。立。は。汝。悟。り。て。洋。母。ら
 ち。れ。と。され。疑。ひ。を。抱。く。も。道。理。な。れ。夫。お。別。と。汝。よ。こ。れ。赤。べ。も。な。れ。と
 かく。所。々。吟。ひ。し。ら。此。國。へ。ま。り。此。家。お。仕。り。れ。婢。女。と。なり。先。主。山。林。太。夫。の
 妾。が。葛。州。塩。酌。の。業。人。お。停。ま。れ。り。汝。は。び。惠。と。深。く。戸。外。の。業。も。免。く。と
 側。女。と。な。れ。間。も。う。の。終。は。本。妻。と。な。も。れ。家。の。も。心。の。仕。は。行。め。と。し。之。も。

何不足なり。是も任せしむる子なり。五年待て七年経ても更ふ月を電る
 をさしおものいひ。いさお先の夫山本大夫。山城の国清水寺親世音へ宿願
 の心をやつひ小神佛へ近寄こも嫌ふ。自ら詣りに彼迎あて何者の
 為あり討たれ。汝が父と違ひ飽きて富て心の任なり。それを思も涼く。仇次
 討んとおひぢれども力と憑べともなく悔ひおひけり。今の夫此國お排
 徊る。そ下癖のありのとおひけり。よ色情は引入。此家の名跡を譲りて
 山本大夫と名告し。このあさるの昔日月逝ぬ老をれを恨が過るやと
 知とぬ敵を夫は頼と空しく暮し。ゆれ中に汝がる。汝おひ出さる日も
 形。ゆりゆりも廻り達し。妻が宿意の届きし。ゆれおひけり。おひけり
 と笑ひめて。二即安堵のありひけり。吻と息吐てし。おれを。叔を我母とて
 のりけるや。あつじくおひけるに。今親子の縁れ。そがれを名告合さるの

突つれ。小子六才の時國と去。便さる。おひけり。おひけり。おひけり。緑由
 次か。りて。意圓僧正の弟子となり。十五才よ及び。とよと。彼地を下山は
 發皮の知方を求め。越後の國へ行山角太夫と名乗。達岐橋の元。多く
 の兒女を勾引。活業と。中。それより。近江の國。沓馬の長者の。財宝と。お
 任。盗。こ。上。山の横。菱。や。鈴。鹿。山。へ。登。り。再。僧。を。起。し。も。忽。ち。旅。徒
 の。乃。ふ。死。お。か。く。取。り。汝。ら。け。此。家。の。奴。僕。を。救。れ。我。福。ひ。と。な。れ。と。語
 った。し。ゆ。ゑ。は。其。計。を。な。さん。と。斬。捨。其。命。を。棄。ひ。岬。坂。の。孝。女。を。拐。挾。す。の
 家。へ。あ。り。し。り。て。一。十。百。千。踏。む。に。誇。り。小。子。が。本。名。を。告。ぐ。を。何。く。利。を。ほ。す
 ニ。ツ。キ。を。あ。が。け。入。籍。せ。し。光。景。な。れ。と。觀。吾。の。名。を。除。く。が。か。ら。う。に。此。家。の
 未。通。女。肯。ふ。は。じ。と。れ。を。名。け。け。の。名。を。り。て。嫌。姻。を。整。入。め。ん。あ。う。と。せ。し。て
 り。を。橋。立。と。原。来。子。と。濁。し。易。く。別。と。親。子。の。名。告。も。な。し。ぬ。れ。が。尚

寵愛も浅うらむ。此家のつゆと暮る心よあれを必と勞さる事なれ。差
 けけ賞金と取るべし。一計あり。汝もさうもあはれん。磐石の判官あま
 家臣村岡玄蕃が為小弑せられ。今玄蕃國を治ども正氏が姫安素
 都志王母諸とも行方知と。尋牛根を新葉を枯し。おがく玄蕃と栄
 翁を極めんと四方へ人を走らせ。我家小多く男女を取扱ひければ。彼
 兩個を尋出と。とに於そ。數多の賞次得と。とて。村岡玄蕃が
 家士我家よ。尋りぬ。合と。人繪姿を所持なり。おれはし。かれは。深房
 へ。忍む。せ置けり。形。村岡玄蕃。く。し。れ。人。と。汝。父。上。遠。太。平。へ。古。主
 かね。磐石家の者とも。ハ。汝。が。為。め。も。敵。の。端。なり。先。小。汝。が。伴。に。け。系。災
 少年。こ。て。賤。つ。ら。げ。れ。お。小。え。と。れ。れ。果。して。一。途。織。り。と。と。れ。なり。され。む
 あり。討。つ。と。と。と。高。織。り。け。れ。

第十七

都志王薪を怠りて額印を

却て都志王丸と艾の償。お。這。家。に。引。止。られ。忘。草。と。名。取。替。七。下。の。連
 山七曲の山路行難も。いと。つ。限。り。お。と。數。の。艾。煎。業。と。の。み。ま。と。怠。り
 なく。け。と。め。し。ご。と。や。今日。は。嚴。寒。烈。しく。吹。雪。裾。の。縷。も。残。り。と。氷。柱。を
 せ。と。も。足。と。我。身。を。放。し。杖。も。た。ら。道。も。這。も。登。り。力。も。止。り
 所。を。知。ら。ぬ。途。が。上。小。丈。母。過。り。た。柴。を。背。負。われ。此。方。に。こ。り。彼。所。小
 倒。し。け。れ。を。哀。と。せ。ら。ぬ。り。の。も。お。我。も。一。把。二。把。と。刈。取。り。取。入。る。人。の。情
 あり。忘。州。を。漸。四。五。把。の。柴。と。り。の。あ。り。ち。橋。立。の。お。へ。出。し。め。れ。と。橋。立。を。眼
 を。瞋。り。し。と。や。り。の。も。夕。梵。近。し。汝。十。支。以上。の。牙。を。り。て。大人。の。む。く。飽。す。て
 食。ひ。四。五。把。の。柴。も。て。償。り。ん。とは。憎。と。り。の。食。盗。人。と。い。ふ。と。七。告。げ。人。の
 あり。て。父。は。る。に。草。刈。の。友。れ。助。を。受。其。身。怠。り。形。が。吾。州。夏。伏。す。て。お。め。く。と

歸てよめれと心太に阿古に疾行く不足の分を刈取也。此上支の助
 百把千把のりも倍よ。その骨より所取柴よりあつたの倍増二十把刈り。と罵
 ば。忘州を悲しく十把の柴と人のなごりにゆげれむ。何ぞ刈り取らる。事の
 なるをぞ。其より夕梵に近し。十把が五把も刈得ることなるをばし。と泣く
 外のりぞ。山角と忘州を鬚どり。中を空法をばし。人を訛きもはば
 のの事。此家まで一個も哀とほむ。さうさうものほし。無益の泪を費そ
 る勿き。実小泪をゆくと形くば先これを受く。後小泪をゆくととる。合
 せられ薪をとり。さうさうか打られむ。聲を聞き。難儀とおも。我しち
 けさは打て。やよ骨身もさうさうや斯撃れ。難儀とおも。我しち
 を請じて。真直母いふ。汝頃日々流をけけ。つらに肌を放ち。守り
 袋を賤し。たり。持ちたる錦ふの。正しく汝を警木の判官正氏の子

都志王丸あり。包み多く白地吐き。いふ。都志王は極まらう。今より
 ちくち賤し。柴刈の業とより。厚く敬ひ。膏梁をりて。飯はば。んなど
 りて。あまほし。すりしけ。ぬお。回答なく。汝都志王よ。あつげれ。斯の。さうさうと
 打ち。おと。命を更。お。ほ。ひ。も。父。お。こ。れ。母。お。い。れ。う。さ。う。さ。う。と。一。人。の。奴
 君の行跡を一度。捜も。と。え。あ。ひ。の。憂。を。語り。合。法。お。り。し。う。れ。上。あ。て。の。
 叩責て。淋。され。い。は。れ。ぬ。お。い。も。い。も。あ。ま。ほ。し。權。ゆ。じ。て。と。泣。め。れ。を。山。角。の
 目を。ゆ。げ。に。此。上。い。ふ。せ。め。れ。も。あ。ぶ。と。さ。れ。ば。死。す。の。賞。金。お。易。べ。れ。と。失
 ひ。詮。お。る。る。し。婆。繪。お。り。く。く。る。有。無。は。に。村。岡。が。家。士。に。渡。さ。せ。し。此。依
 い。ふ。な。さ。と。え。れ。と。母。橋。立。と。商。儀。を。な。し。捕。り。ん。と。さ。れ。と。後。の。紙。門。の。中
 より。手。ゆ。れ。し。と。聲。う。け。ま。し。れ。と。主。の。山。根。大。夫。山。角。次。片。方。へ。退。け。忘。草
 を。取。り。引。引。火。中。へ。鉄。箸。を。し。し。入。權。め。り。て。火。の。如。く。灼。鐵。を。り。て。い。は。れ。州。の

山根大夫巻之四

七〇



額へらゝ強くも印をなまき玉の如く面も忽ち二筋の焼くられぬ痕
 は息も後氣ふらごりて即と板流石の兩個の悪人も呆々棒々て入
 けれを大夫と笑を含み這如きの悴れ仕付一個なび二位しておまごん
 悪さん此上二十把三十把紫と薙四十荷五十荷の鹽を汲てれも我公
 足かんや多くれ奴婢のえせしめ焼印をぬいて摸著者の目印とほる
 ねり此上を我傍お置と我ら後の位お責なんと夫丹まごめ入る山角
 としての間あう奥の方へ走り入るん観吾雄を左右ゆ携へ不義者なりと
 大夫の前へ引居しれを向方なれ別房に男女の泣つ笑つの声の偶耳お
 るんじゆ急行とて我果して我妻と姦通なると形と入るんを
 され男子なり余更の憎とて大夫の前へくさるみ興丹入んと討めし
 こそ飛かりんとかせて此方お身おばくさるん太夫制して入るん。

去りても公得るれ雄が伴ひしれえ訓がる男子我娘誰し是なる
 云約定の觀吾に羞をふんとおの腹支や。ゆ地よりおれ姓を
 詳おいへと責られ我と託馬觀吾といへれおのせりと女捨ま山角
 もあひお驚と橋立と目成志くしおれ我も又託馬觀吾といへる者
 なり。同名のおはじえそのおもあはれも何を表證となさるん固
 有や。觀吾のせれと吾名を賣んはは表證とかなん品もな固
 より此所は足なると余情もれおのう上敢て名を論るお王は
 不働の梵字を彫られ名劍をりて表證とはし入るん上へいふ
 も此家の聲なりおの父と何地お住む姓を何といふて山角答へては
 父と近江の国苗鹿村の長者託馬騰補といへれおのり其持しり劍は
 常に差料おや又名級ゆき寶となさる山角しつては此はより後。

劍がれは常に用ひど床へ飾置たり又何の縁由なりて此家へ縁成
 結ひしは是れは此の世にいましむる思慮を廻し我切に討つれど詳な
 るに父の父と如何なしはるぞや盗賊の為に殺害せられたるもの初
 傍に在りし何ぞ父の敵を討止るや父の必死を余所ふんて逃世
 せや山角めがみ笑ひ我傍におゐる千人万人の賊といふも邪と正小
 對する能はばしてその數もせざれども折悪く他國はぬれ故に父と
 討つるのこのわが數多の財宝を奪つれば家藏もとく破られ人の位
 こそおぼく驚き歎くはとおひひ生世にほお泪ぐと云われ觀吾
 らるる一雄を要ん為に我名代傳るとも今紅き紅き刀なりぬれもい
 りも不審に彼劍をいひしてお入るやこれぞ手かたも成色と
 心は喜びりしれどは身他國の跡を父と賊と討て財宝悉く奪つれ

家藏滅却はしつれ跡へは身及國はし其名劍をかり跡小残あるは謂
 かなしお入るはけがれに説きしと責りま不敵の山角も大に行結
 務互も熱身に行きけり回答もよくもえへれば引とて詮儀るは
 と思へ我機を去夫制し兩個一名かれも先に入身觀吾と表鏡者
 けれ上の疑ふもおと聲なり我聲をして敵對る者われを夥の奴
 僕をして打ちおつなり後お入るなり娘を誑さんとす觀吾これ一詮義は
 善惡の實否より一命が断後の禍を避へられ暫く留置雄に預る
 かよく取逃をゆめられ父の詞小悦び秋心あるの心混乱を我を押咎め
 我小房へ住ひぬ搦立山角も大夫の非道の公意あるはとぞ

山井大夫榮枯物語卷之四畢

